

龍谷顕真会会報

も く じ

記念講演

「変革期の政治と経済」 京都大教授 高坂 正堯 2 ~ 6

体験発表

「五期議員の苦悩と喜び」 兵庫・南光町議 経谷 隆道 6 ~ 8

悼詞「故三輪先生を偲ぶ」 滋賀・五個荘町議 西 文雄 9

昭和 62 年度総会報告・その他 10



龍谷顕真会の昭和六十二年度の総会は、昨年の五月二十七日、本山の宗務総合庁舎を会場に会員十四人、賛助会員十一人の出席のもと開催した。開会式では勸行の後、渡邊静波総長、井上博厚総務、西文雄代表世話人代行のあいさつがあり、続いて研修室において楯大亮南富良野町長を議長に選出した後、総会に入り予算案、事業計画案などを審議、承認した。さらに世話人改選を行い三輪善海相生市議のほか十一人を選出した。また、世話人会の互選により三輪市議を代表世話人に選出したが、三輪市議が病氣療養中のため世話人会から西文雄五個荘町議を代表世話人代行に就任してもらうべく提案があり、満場一致で承認された。その後、記念講演、恒例の会員による体験発表があり全日程を終了した。

また、昭和四十九年四月に本会が結成されて以来、代表世話人を勤められた三輪市議は肝不全のため昨年の六月九日ご逝去された。会員一同、本会の発展に尽力された故人のご功績に深謝いたすとともに、慎んで哀悼の意を表するものである。

以下、総会の報告、講演録、故三輪市議に対する追悼文等を会報第七号としてお届けする。

記念講演

変革期の政治と経済

京都大学教授 高坂正堯

世界を支えた米ドル

現在の世界と日本について、いろんな意味で変革期ということができると思います。第二次世界大戦が終わって四十年余りになりますが、終戦後二、三年もすれば次の秩序というものが出てくるわけです。昭和二十二年頃



には世界は正常に戻り、現在の政治経済の大体の仕組みが確定したといえると思います。その制度を使って発展しますと、制度と現実とが合わなくなるといことがでてくるわけです。そこでいくつかの項目を申し上げておきたいと思います。

まず第一番目は、アメリカが圧倒的に強い力を持っており、世界をリードしてきたという状況が終わったということです。第二番目は、現在の先進工業諸国における政治経済の仕組みがうまくいって発展したため、そろそろ改変を必要とするということです。第三番目は、経済を発展させてきた技術の可能性を使い尽くし、新しい技術というものがしだいに始めているが、世の中を大きく変えるほどにはなっていないということです。技術の上でも、変革期といえると思います。

第一番目のことについて言えば、アメリカ

講演者略歴

高坂 正堯（こうさか・まさよし）
京都大学法学部教授、国際法学会々員
法学博士、国際政治学専攻。京都大学
学部卒業、ハーバード大留学。著書に
『文明が衰亡するとき』『宰相吉田茂
論』等多数あり。

の力が非常に強かった、リーダーシップがあったという時代と現在とでは、国際環境が大きく変わっているということです。二十三、四年以前は、ドルは非常に強く安定していました。一ドル、三六〇円というレートで、ドルは値うちがあり変動がほとんどなかったわけです。しかし、今日においては、安定したドルというのは存在しませんし、非常に激しく揺れ動いているといえます。国際情勢というのは、当然ながら不安定になっているわけです。キールレンシー、基軸通貨というのは、非常に難しいものであります。

過去において、アメリカが貿易、国際収支等の黒字でドルを集めすぎると、世界のドルが不足します。反対にドルが出すぎると信任を失うことになります。ちようどうまい具合に、アメリカと他の国の間を回るようにしなければなりません。アメリカの当初の仕組みは、貿易黒字及び金融における収支黒字の代わりに、援助やアメリカ軍がヨーロッパなど

で使う支出などでバランスを取っていたわけです。加えて、産業力が圧倒的に強いため、他の国からの輸入を多くし、輸出は無理をしないというようにしていたわけです。

日本についていえば、昭和三十年頃からアメリカは日本商品を大量に輸入します。日本のアメリカに対する輸出は、どんどん増えるわけです。しかし、日本に物を売ることにあまり無理をいかなかったわけです。それでもアメリカは、貿易収支、国際収支が黒字になる傾向がありますから、お金を渡すことによってバランスをとるというふうやってきたわけです。ところが、アメリカが圧倒的に強い状況というのは、そんなに続くものではありません。他の国が段々強くなることによって、貿易収支は大幅な黒字から小幅な黒字に変わるわけです。そして今から十五、六年前には、赤字に変わります。ただ、それまでに世界に貸したお金がたくさんありますから、その利子勘定でちょうどバランスがとれるという状況になってたわけです。

アメリカ経済の鯛落

一九八〇年代になりますと、輸入が増え、輸出がそう増えないという状況で貿易赤字は増大し、ドルを安定して保つことができず、基軸通貨国としての責任を果たせなくなりま

した。

基軸通貨国というのは、自分の国の通貨が世界に通用するわけですから、刷って世界に配ればそれで物が買えるのです。そういう特権的な地位を利用した政策をとるわけです。

新聞でご存知のように、アメリカは世界一の債務国になったというふうない方がされていきます。日本は純債券が二千八百億ドルで世界ダントツになったといわれ、アメリカは純債務が二千億をこえたといわれています。しかし、アメリカは世界一の債券を持っており、借金も一番多く、その債券の質まで考えないと、本当にどの程度悪くなっているのかということはわからないわけです。しかし、毎年、毎年の勘定はあわず「以前とは逆の輸出はさせろ」「輸入については、いろんな制限をする」という格好になってきています。要するに放っておいたら、貿易収支が赤字になるわけです。アメリカが大幅な貿易赤字をだす原因として、財政赤字が大きいことがあげられます。また、政府も国民もお金をたくさん使っている、働いて生み出す富より多いため、外国からツケで物を買うということがあげられます。今の状況が続くと、ドルの信任が下がるとか、為替レートがさらに下がるという問題がおこります。

ですから、財政赤字をなくすということに踏み切り、ドルを防衛するという方向に進む

と思います。が、なかなか大変なことです。それから、アメリカが民間レベルで稼いだものを、今の程度に使うのではなく、機械設備等の投資に使うことが必要になってくるわけです。

例えば、日本とアメリカは、自動車輸出について協定を結んでおります。日本はアメリカに対して百八十万台位しか売らないという自主規制をしています。そのために、アメリカの自動車業界は空前の利益あげているわけです。その利益を日本の会社であと、社内保留金にして設備投資に使用しますが、アメリカは株主に分けたり、ボーナスとして支給してしまします。アメリカの自動車業界の転換が遅れているから、ちよつとぐらい保護させて、再建を期待しようという日本の自主規制が、経営者のボーナスをよくするためにしているくらいがあるわけです。

強くて、責任を持っていたアメリカがそれほど強くなかって、相当程度責任を放棄している。しかし心の中に緩みがあり、そう心配していない。以外にのん気になっている。これが、この変革期の一つの問題だと思っています。

売るために買う日本

次に、日本の場合についていえば、まず第一番目は日本はアメリカのマーケットに売る

ことによって産業を伸ばしてゐるわけです。

輸出の四割は、アメリカに對するものです。日本はアメリカ以外に大量に物を売る市場を持っていません。このアメリカの市場が前ほどオープンでなくなつてきていることが、大きな悩みといえます。

第二番目は、日本はいまや世界ナンバー2になり、非常に多くの債券を持っています。しかし、これはドルで持っているわけです。一部は土地、株になっていますが、証券類はアメリカでインフレが起こつたら、紙クズになります。だからアメリカが財政赤字を出しても、その財政を支えなければならぬという妙な立場にあるわけです。アメリカは財務省証券というものも売ります。しかし借金が大きいため、その受け取り手がなくなつてきています。

日本がもう買わないとなると、ドルは暴落する可能性があります。そこで、日本はアメリカのために自国のために財務省証券を買うわけです。本当は、アメリカに財政赤字をなくしてもらうのが一番いいのですが、その責任を怠っているわけです。その責任がやがて出てくるのを待つしかないのです。この意味でなかなか大変なことだと思います。

第三番目に、日本はいろんな意味で「物を買い」という圧力にさらされることです。ただ、外国の要求があつて、相手国へご機嫌を

とるということだけで、物を買ふと考える方がいいと思います。輸入についていえば、日本はアメリカとは逆の意味で体質の転換期にきているということです。三十年前においては、日本は売らなければ買えないという国でした。買うものがたくさんあつて、売るものはあまりないという輸入超過の国柄でした。

ところが、十数年前から売るために買ふなければならぬ状態になってきました。二つ売つて、一つ買うくらいのかんじになってきました。アメリカの場合は、買うために売らなければならぬというほうに変わりました。しかし、それに必要な政治の役割の変化、国民の態度に変化ができていません。日本において、売るために買ふなければならないという方向に徐々に変わつていくのですが、それをどのようにやつていくことができるかというところが問題になってきます。これは体質を変えなければならないため、難しい問題です。

岐路に立つ保護農政

例えば、最近わが国ではマル優廃止の議論がさかんになってきていますが、これについても日本とアメリカではすれ違ひの政策、制度を持っています。日本にはマル優があります。世界の先進工業諸国では、日本だけしかありません。これは貯金が必要だったときの

制度です。アメリカは、マル優がないだけでなく、貯金の利子に對する課税というのは、総合課税になっています。貯金することは得になりません。逆にローンの場合、その利子は所得から引けますので有利になります。日本の場合は逆になるわけです。これを変えなければならぬ時期にさしかかっています。

農業保護についていえば、ある時期の日本にとつては、非常に大事なものでした。鉱産物といった鉱業と違ひまして、農産物は輸入したら全部食べるわけですので、外貨を消費する率が一〇〇%だと言えます。鉄鉱石は、買うとき払いますが、作つた物で売るわけですから、一〇〇%消費するわけではありません。その意味で貧乏なときの日本は、農産物の自給度を保つことは意義がありました。だが、今となつては、むしろマイナスとなつています。

それは、日本人のエンゲル係数が先進工業諸国の中では断然大きいわけです。余分な物を食生活に回わしているので、他の物に金が使えません。それだけ消費構造を歪めていきます。また、日本の場合には小さな農地が点々としています。土地が不足しているので、土地使用については、非常に大きな問題です。農地を解放すれば、値段が下がると考えられるわけです。土地と消費構造の両方の面において、現在の農業政策は、日本を歪めていま

す。現在の日本の農民の大多数は、兼業農家です。米の値段が上がらなくとも、十分やっています。専業農家は、耕地が広がりませんので、自由化した方がいいわけです。

さらに、今の形の農業保護が続きますと、自給度はどんどん減ります。養鶏、ビニールハウス栽培等は、外国からの輸入資源で物を作ります。それらの方が安くつきますので本来の意味における自給ではありません。そして、専業農家が減ってきてるだけ、農業は弱くなってきています。変えなければなりません。しかし、農協を中心とした反対運動があります。自由化は一見、農家の利益に反するようですが、長い目では農家にとっても、良い結果につながるものと思います。農業問題が変革期における最大のものかもしれません。経済の論理で言えば、日本の農業が当面している問題は合理的に変えることができます。しかし、経済の制度というのは、政治の制度とも結びついており、既得権利を経済団体を持っていますので、政治的には難しいのです。経済上、一番妥当なことをやろうとすると、政治的な反対が強くなり、選挙等の関係で変えにくいわけです。

売り上げ税の導入を

同じようなことが、売り上げ税の問題にも

いえます。狭い地域や支持団体の殻を破って政治家が動けるかという問題です。日本の国家財政は赤字であり、大部分は社会保障によるものです。社会保障とは、世界中の国々が間接税によって、補わないとどうしようもないという性格を持っています。直接税ですと、相当高い累進税率になります。四割か、五割を超してしまいます。福祉国家のための支払いをしていくかということの転換期にきているといえます。五十年前から世界中で福祉国家の制度が導入され、それなりに成功を収めました。ところが、誰が払うかという問題があります。そういうことから所得税を減らして、間接税を増やすということが、世界中で行われています。

一方、ヨーロッパの国々は売り上げ税に慣れています。しかし、アメリカは、所得税の減税をして、間接税の導入をしませんでした。したがって財政赤字が大きくなったのです。日本においても、誰がどのようにして福祉国家のコストを負担するかということが、今、問題になっていきます。この問題に解答を与えることで、日本が将来安定して発展していくことにつながります。売り上げ税という制度が実施されない限り、福祉国家の実現は困難でしょう。選挙等の関係で売り上げ税の実施は今のところ不可能ですが、財政赤字を解決するためには、売り上げ税を導入しなければ

なりません。断固として政治家は責任ある態度をとってほしいと思っています。日本の場合、年金のお金は何十兆とあります。しかし、二十年・三十年に一回インフレがあれば、お金はパーになります。子供や孫の時代の経済がどれくらい健全かによって、お年寄りの生活が決まります。老人の生活は、必ず子供と孫がどのくらい働くかにかかっています。だから、我われの時代は、子供をたくさん作りました。そして、我われはよく稼ぎました。でも自分のお金を貯めるのも大事ですが、それがすべてではありません。やがてインフレが起きてパーになります。

これは国の問題にも言えます。外国、日本に近い諸国が、どれくらい成長するか、どれくらい安定するか、ということが大事です。アメリカに投資する、そしてアメリカの経済がうまくいけば、そこから利子が入ってきます。韓国にお金を投資して、それがうまくいけばお金が入ってきます。その意味で我われの老後というのは、五・六十年後の子や孫の経済が世界的にうまくいっているかどうかにかかっています。それだけに、もっと積極的に年金制度について考えた方がいいと思います。じつと持っているだけでなく、積極財政を実施していくべきだと思います。

そのためには二つの条件があると思います。一つは、売り上げ税を含めて、赤字を減らす

ことに責任ある態度をとることです。もう一つは、将来、世界も含めて経済が伸びるということを前提にしているということです。貯めたお金は、人に生かして使わないとどうしようありません。しかし、実際に実行

体験発表

五期議員の

苦悩と喜び

兵庫県南光町会議員

経 谷 隆 道

(兵庫県教区佐用組西蓮寺住職)



するのは難しいわけですが、それがやれるかどうかということが日本の将来を決めるということを念頭においておかなければなりません。ともあれ、転換期とか、変革期における経済政策は、常に難しいものであります。

推薦なしに立候補

諸先輩を前にして、私のつたない体験をお話させて頂きますこと、光栄に存じます。私は僧侶ですが、お経を読むのはヘタ、お説教もだめ、何のとりえもありません。そうした私ですが、だからこそというか「ひとつ町会議員にでも立候補してやろう」と名のりをあげました。そういうことで、現在、町会議員を五期つとめています。

私は若い頃から戦争が大きらいでしたから龍大の専門部を卒業後、満州の新京別院へ開教使として赴任いたしました。そこに五年余りいて開教に従事していたのですが、昭和二十年に赤紙の臨時召集が来て入隊しました。ところがすぐに終戦となり、シベリアに三年抑留され塗炭の日々をおくりましたが、二十三年十一月に故国の土を踏むことができました。帰ってみると寺は本堂、庫裏とも焼けてありません。抑留中に隣近所六軒が焼ける大火があったそうです。まさに浦島太郎でした。

百八十余りのご門徒の方々が古い民家を買って飯庫裏を建てて下さっていました。そこにご本尊がご安置されていました。情ない思いでいっぱいでしたが、長男ですから寺の復興をしなくてはなりません。

私も一度はシベリアで死んだ人間です。寺の復興と町民のためにお役にたきたいとの思いの二つをこころざしに立て、町会議員選挙に立候補したのです。ご承知のように寺の住職が選挙に出るとなると色々制約されます。それに私の町はいくつかの村が合併して間もない頃でしたから混とんとした状況にありました。それぞれの地区では選挙前に誰を出すかを決め、地区推薦します。こうした暗黙の「ルール」のあるところに私が突然立候補宣言したわけですから大騒ぎになりました。昭和三十八年のことです。このときの選挙は補欠選でしたが、私は誰も推（お）してくれないまま選挙戦を闘いました。

なにしろ「地区推薦」のない候補者ですから孤軍奮闘、自転車の後ろに街頭演説の旗を立てお願いに回りました。そして選挙後、フタをあけてみると私が最高点で当選。びっくりしました。補選でしたから任期は一年でしたが、次の選挙では三位で当選しました。住職兼町会議員の本格的スタートというわけですが、ところが、住職が政治の場に出てもかけひきは上手にできません。サービスピ精神にも欠け

ます。そういうわけで四回目の選挙は、わずかに二票差であえなく落選。原因は寺の近くに住む門徒総代が立候補したからです。

結局、選挙は七回やって六回当選。現在五期目でここの七月末で二十一年間つとめさせて頂くことになりました。この間、議長も二回つとめました。それにしても住職と町議の二足わらじをはくのは、いろいろとつらいことがあります。「ごえんさんが選挙に出るのなら門徒をやめる」という人もいて、実際に二軒ほど門徒が減りました。だが、いづれにしても、ご門徒の方々のおかげで政治にたずさわることが出来るわけです。

町長は共産党々員

さて、そろそろ本日のテーマに入りましょう。講演の依頼は広報部の中山部長さんから「議員としての苦悩と喜びを具体的にお話してもらえないか」と言われたのですが、苦悩はあっても喜びはたいしてありません。でもテーマが「五期目の苦悩と喜び」ですから私なりに卒直にお話させて頂こうと思います。

まず、私の町の町長は全国でも珍しい共産党の党員であることからお話しいたします。田舎の町になぜ共産党の町長が誕生したかはみなさんになかなか理解してもらえないように思います。それも二期つとめておられます。

全国でもまれなケースですので、あちこちの自治体から視察に来られるほどです。この町長は隣の町の出身なのですが、町の住民がいろいろな問題をめぐってギクシャクしていたときに町長選挙があり、突然に立候補して、あれよあれよという間に当選を果たしたというわけです。そのとき弱冠三十五歳の若さでした。本人は非常に頭がよくて地方の国立大学を卒業しています。選挙には党の大きな宣伝カーはのりこんでくる、多士多彩な応援弁士もやってくる。やはり共産党の組織力はたいしたものですね。そればかりでなく本人も腰が低くて、ご婦人方に圧倒的な人気があります。ハンサムはトクですね。(笑)

この町長、誰をみても彼をみても挨拶をして、握手を欠かしません。運動会に招かれても決して来賓席にはすわらない。その町長が二期目の時に文化センターを建設いたしました。四百五十人収容できる立派なもので映写設備も整っています。総工費は四億五千万円かかりましたが、歯科保健センターも併設されていますので、老若男女が利用できます。

つらい三回目選挙

この文化センターで毎月のように「福祉祭」とか「健康祭り」、バザーなどを地域婦人会に呼びかけて活発にやっています。講演会も

有名な先生を招いてやっています。もともと講師には共産党系の人が多いようです。さらに公民館活動を活発に推進しており、陶芸教室、町民大学講座なども一カ月おきに開き、そのたびごとに町長はあいさつをして、人気はますます上がるといわれています。来年の九月に改選ですが、この町長の時代はまだまだ続くでしょうね。

町長だけでなく、議員にしても三期目の選挙がヤマです。三期目を越えることができれば、あとはズブーッといきます。からださえ元気なら五期でも六期でもできるので、しんどくなってくるのでやめてしまう人が多いですね。さて、話を戻しまして、テーマの「苦悩」ですが、共産党の町長になって困ったのが、戦没者の追悼法要をやめてしまったことです。それまでは浄土真宗の門徒が町民の八割を占めるところですから、私たち住職が総出で法要をおつとめしていました。町民も『正信偈』を共に唱和していたのですが、共産党町長になってから「特定の宗教の行事はできない。憲法に違反する」と言って中止してしまいました。その後は追悼式という名のもとに無宗教で行われています。私はこのことがとても不満なのですが、今のところどうしようもありません。町長の方針にいくら反対しても多数決の原則にはばまれてしまいます。このことが苦悩の一つ。

つらい誘致と陳情

次なる苦悩。議員は中央の諸官庁や国会議員のもとに毎年のように陳情に行きます。特別交付税を少しでもたくさん頂くためです。

ところが共産党の町長と一緒にいきますと具合が悪い。地元選出の自民党の国会議員を訪問しましても「まだ共産党が町長やっているんですか」と言われます。官庁も熱心に陳情を聞いてくれません。そういうことで、私の町は郡内で最も特別交付金が少ない。県庁に陳情に行っても、書類が一番下に回されているような気がしてなりません。

しかし、町民にはこうした状況がわかってもらえません。私たち議員が悩みに悩んでいるわけです。もともと十二人の議員のうち二人が共産党で、いずれもなかなかの論客です。さらに共産党の町長ということで、企業誘致もさっぱり。「共産党が力をもっているような町には行けません」とつれないものです。以前は補助足袋の下請け会社があったのですが、これも閉鎖してどこかに行ってしまうしました。来るのはパチンコ屋ばかり。それどころか企業が出ていった跡地を「エホバの証人」とかいふキリスト教系の新興宗教団体が購入する動きもあります。これには浄土真宗の僧侶もびつくりして反対の署名運動も行っている

ますが、不安はかくせません。

町民は働く場所を切実に求めているのですが、今のところ人口減少に歯止めをかけるメドは立っていません。ところが町長は「いやいや、これでも良くなった」と強気のかまえて、三期目をめざすべく着々と準備をすすめています。三期も出てもらったら大変ですから、町の助役経験者や各種の組合長に町長選に立候補するよう要請するのですが、「今の町長とはとても戦争できない」とみんな尻ごみをします。

ハムレットの心境也

私も五期も議員に出させてもらいましたので「きれいに引いて、若い人に譲りたい」と支持者に申し入れております。だが、若くて優秀な人は立派な会社につとめており、出る人が見当たらない。この七月末に六期目の町会議員選挙が迫っていることもあって、支持者から「若いもんがいなくてごえんさん、場つなぎでもいいから立候補してくれ」と说得されています。さりながら私も少々くたびれ気味。息子も「お父さん、次の選挙はやめときなよ」と言われています。私も心の底の方では八そろそろやめどきかなVハ住職一本にしぼってがんばってみようVなどと思うこともあるのですが……。

ところが、選挙を一度でも体験すると改選期が近くなるとじっとしておれません。病気のようなものです。シベリアに抑留されて一ぺんは死んだ身ですから、みなさんのためにもう一度ご奉仕させてもらうべきなのか……。いずれにしてもハムレットの心境です。

私の苦悩とは以上のようなことですが、みなさんにご理解を頂きたいのは何も八共産党が悪いVということをここで訴えたいわけではありません。あくまでも町民が選挙して選んだのですから。町民に人気があり支持されていることは間違いない事実なのです。

最後に「喜び」についても述べておかななくてはなりません。しかし、これまでが苦悩の連続でしたから「喜びは？」と問われても正直なところ八何が喜びなのだろうVといった思いです。敢て「喜び」を申しますなら、ご門徒に支えられ住職をつとめさせて頂き、そのかたわら議員として地域の発展のために尽力させてもらってきた。ごくあたり前のことかもしれませんが、それをしみじみと喜ばせてもらえるようになったのは「五期」も議員をやらせてもらったおかげでしょう。ご清聴ありがとうございます。

八事務局付記V 経谷氏は、昨年八月の町議選に出馬して当選、現在六期目をつとめられている。



本日ここに龍谷顕真会代表世話人紫光院釈善海師の葬儀が執行されるにあたり、龍谷顕真会を代表して謹んで哀悼の意を表します。おもえば三輪先生は、昭和四十九年本願寺派の僧侶で地方自治体の首長、議員をつとめる者の研鑽、交流の場である龍谷顕真会が前門さまのご命名によって結成されて以来、代表世話人として会の興隆発展に心血をそいでこられました。そのご功績は言辭に尽くせないものがあります。

私たちが会員は、先生から僧侶として地方政治にかかわることの意味、あるべき姿、さらにはめざすべき目標などをおりにふれ懇切にご教示頂きました。ことしの五月二十八日、龍谷顕真会は六十二年度の総会を開催しましたが、先生は病院の検査日と重なったためやむなくご欠席になりました。このおり任期満了に伴う役員選挙を行ったのですが、向こう二年間も再び先生からご指導を仰ぐと、満場一致で代表世話人へのご就任をお願いした次第です。それだけに、先生のにわかな訃報に接したときの会員の衝激は大きく、私とてしげし言葉もありませんでした。無常のことわりと老少不定の習いはかねてよりお聞かせ頂いておりますが、私たち会員にとって先生は無常の風も吹

故三輪先生を偲ぶ

ご教示頂いた基本姿勢

龍谷顕真会
代表世話人代行

西

文雄

滋賀県・五個荘町議

きかえず不死鳥のような存在でした。しかし、二度と再び先生の単刀直入の上に理路整然とした論旨、それでいて人なつこい語り口を聞くことができなくなりました。それを思い出すとき、胸中、万感こもごも去来するものを押えることができません。私も現在、滋賀県の小さな町の町会議員をつとめており、先生と同じく議長職にありま。先生を政治の師とも仰ぐ私にとって、お教え頂きたいことはまだまだたくさんあります。さりながら先生から政治にかかわる者の基本姿勢としてご教示頂いた「何事にも準

引きぎわも実にあざやかでした。本音を容易に言わない政治家の多い中で先生は言いにくいこともきっぱりと切り切る方でした。それでいて人びとの苦悩、願いを切ないまでに我がものとされ、政治に取り組まれたのです。住民の方々はこのような先生の心ねに對して先の統一地方選挙においても現職ではトップの票を贈られました。

こうして先生の政治家としてのありようをうかがっていきますと、そのよって立つておられたところがお念仏のみ教えであつたと、しみじみ味わせて頂くものであります。

政治家にとつて六十三歳という働きざかりの年齢で、お浄土に還帰されたことは、先生ご自身はもとより私たち会員にとつても残念至極であります。しかし、私たち会員は及ばずながら先生の願いとご教示を体して地方自治体の発展と宗門の興隆に尽力いたしますことをここに誓ひいたすものであります。

先生のご葬儀に際し、謹んで悼詞を贈り、生前の業績を顕彰するとともに深甚の敬意と哀悼の意を表する次第であります。

(本葬ののりの悼詞)

備万端怠りなく」と「住民の苦悩、願いを我がものとして」という二つのお言葉をすわりとして議員の職責を果たしていく決意であります。政治家であり宗教家でもあつた先生の足跡をふりかえるとき、これら二つのお言葉を足事に実践されてきたことに感佩するばかりであります。

先生は議会の基礎が綿密な資料の収集と地道な調査であることを身をもって教えて下さいました。さらに、住民の方々の苦悩と願いをエネルギーに議会へのぞまれていました。こうしたことからあいまいな答弁には容赦なく追求されましたが、ひとたび意が通じれば

△故三輪善海氏の略歴▽ 兵庫県相生市矢野町榊七四五・法林寺前住職。昭和四十六年から相生市会議員(五期)、市会議長(二回)、昭和四十五年一月から六十年十二月まで本願寺派宗会議員(五期)。昭和四十九年から龍谷顕真会代表世話人をつとめる。昭和六十二年六月九日肝不全のため相生市の半田病院で死去、六十三歳。本葬は七月二十四日午後一時から自坊で執行された。喪主は長男で法林寺住職の善紀氏。なお、本葬には西文雄前龍谷顕真会代表世話人代行が参列、悼詞を述べた。

代表世話人に 川越氏を選出

去る一月二十日開催した世話人会において、

会則第七条にもとづき昨年の六月九日死去した三輪善海代表世話人の後任に山口県美祢市議員で美祢市・西音寺住職の川越証真氏（六四歳）ハ||写真||Vを選出した。任期は昭和六十四年の五、六月頃に開催する総会まで。選出後、川越氏は「龍谷顕真会は結成して十五年目を迎えました、いろいろな意味で転換期に立っています。今後は宗派の諸般の事情もあるため会員の意識の高揚につとめ、自主運営の確立をはかっていく所存です」と抱負を語った。



また、昨年度の総会以来、代表世話人代行をつとめていた西文雄氏は昨年十月、五個荘町会議員を引退したことで、一月二十日付をもって世話人を辞任した。

なお、一月二十日の世話人会で決まったことは同封別紙に掲載。

昭和六十二年

総会報告

一、日時 五月三十日

二、出席者 二十五人（会員十四人・賛助会員十一人）

三、総会日程

①開会式（於・大会議室）

②総会及び協議会

イ、議長選出 北海道・南富良野町長 楯 大亮

ロ、代表世話人代行・西文雄挨拶

ハ、新入会員紹介 和歌山県由良町議 永原 智徳

ニ、昭和六十一年度事業報告

ホ、昭和六十一年度決算報告

ヘ、六十一年度会計監査報告

監査員 山田 真澄

ト、昭和六十二年事業計画案《承認》

チ、昭和六十二年予算案 《承認》

リ、世話人改選 世話人会において三輪善海を代表世話人に選出、さらに西文雄を代表世話人代行に選出。

③記念講演 京都大教授 高坂 正堯

④体験発表 兵庫県南光町議 経谷 隆道

⑤閉会式（午後十四時終了）

以上

以上

以上

以上

以上

龍谷顕真会世話人

（昭和六十二年五月二十七日改選・任期2年）

楯 大亮 北海道・南富良野町長

花本 肇正 北海道・上川南・玄正寺住職

花本 肇正 富山県・大島町議員

高岡・射水・称念寺住職

兵庫県南光町議

兵庫・作用・西蓮寺住職

香川県坂出市議

四州・飯山北・善光寺住職

山口・美祢市議

山口・美祢西・西音寺住職

山口・岩国・教蓮寺住職

福岡県方城町議

北豊・田川中・高源寺住職

大分県久住町長

大分・岡・安照寺前住職

宮崎県推葉村議

宮崎・臼杵・浄行寺住職

尾前 新了

龍谷顕真会会報 第7号

昭和六十三年二月四日

編集・発行

龍谷顕真会・事務局

〒600 京都市下京区堀川通花屋町下ル

本願寺派広報部内

TEL 〇七五・二七・五一八一